

A fundamental consideration on the pieces of plaquette, including the materials related to the Keicho-era mission to Europe

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 和博 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24027

国宝「慶長遣欧使節関係資料」における プラケット残欠の基礎的考察

佐々木 和 博

1 はじめに

伊達政宗はメキシコ（ノビスパン）と仙台の貿易並びに仙台領内への宣教師派遣などについて交渉するために、江戸幕府の許可と協力を得てメキシコ・スペイン・ローマに家臣の支倉常長を大使とする使節を派遣した。これが慶長遣欧使節（以下、慶長使節と略称）である。1613（慶長18）年、同使節は仙台領月ノ浦から出帆し、1620（元和6）年、マニラから長崎を経由して仙台に戻った。

この使節に関するとされる資料群47点は慶長遣欧使節関係資料（以下、慶長資料と略称）として1966（昭和41）年に一括して国の重要文化財に、2001（平成13）年には国宝に指定され、現在、仙台市博物館が所蔵している。しかし、これらは藩政期においては、一括ではなく二つの系統で保管されていた。すなわち伊達家所蔵品として同家が保管していたものと「預物」として仙台藩切支丹所が保管していたものである。前者は派遣主体者である伊達政宗に贈られたものであり、後者は支倉常長等の個人的なものを中心とする一群である（佐々木2013）。

慶長資料については、文部科学省がホームページで、47点すべてが慶長使節の将来品であると解説している。しかし筆者は、各資料に検討を加え、その結果に基づき慶長使節との関係の有無を判断することが第一に必要であると指摘してきた。たとえば、慶長資料に含まれる野沓と四方手は検討の結果、日本独特の形態を有する馬具で、しかも通有のものであることから、慶長使節の将来品とは考え難いとの結論を得た（佐々木2013）。

本稿で考察の対象とする「プラケット残欠」^{（註1）}

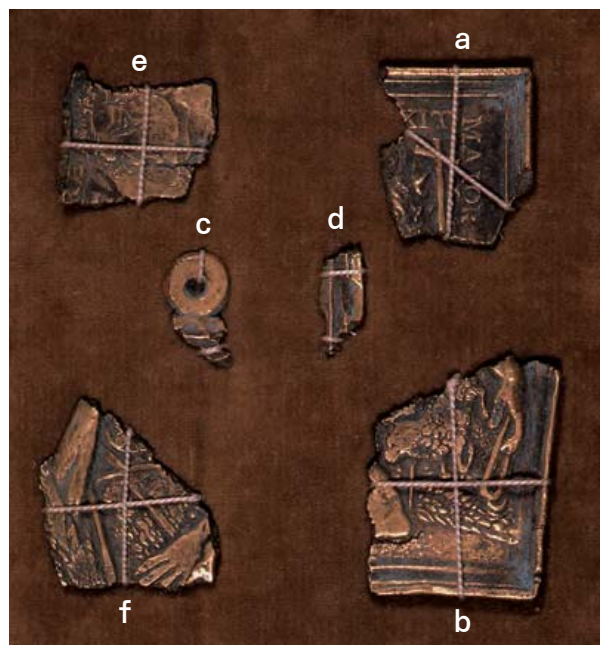
は藩政期においては「預物」として仙台藩切支丹所が保管していたものである。これまで、この残欠についての検討はほとんど行われていない。そこで、これを復原し、年代と系譜などを検討するなかで慶長使節との関係の有無を明らかにし、さらその歴史的な意義についても基礎的な考察することにした。

2 現状及び現状に至る経過

1) 現状（第1図）

板状のものを茶色地の布で包み長方形を作り、その上に青銅製の6片を置き、それぞれ二箇所を太い糸で固定している。

6片のうち四隅に固定されている大きな4片にはレリーフが見られ、そのうちの右上隅aと右下隅bの2片が直角に曲がる部分の破片であることから、方形であることがわかる。中央部



第1図 プラケット残欠

に固定されている小片2点のうち左側のものcには方形縁辺の一部とそれに取り付く鑲が認められる。右側の小片dは右上隅aと右下隅bの大きな破片との比較によって、縁辺部であると判断できる。

右上隅の破片aには「XIT MAIOR」、左上隅の破片eには「RE」の銘が認められる。

最大片は右下隅の破片bで縦50mm、横37mmを測る。

裏面の様相については、固定されているために確認できない。

2) 現状に至る経過

仙台藩侍医で蘭学者の大槻玄沢(1757～1827)は1812(文化9)年、藩の許可を得て、切支丹所保管資料を同所作成の目録に基づき、実見・調査し、その成果を『金城秘韞』下(「帰朝常長道具考略」)として著した。そのなかに「一 めつきのかな物 大小六ツ」との記述があり、これが「ブラケット残欠」に該当すると考えられる。したがって、この時点で6片であったといえよう。

現在、茶色の布上に太めの糸で固定されているが、これは1884(明治17)年に撮影されたとされる写真(濱田1995)と同一の配置である^(註2)。1933(昭和8)年に刊行された『東北遺物展覧会記念帖』掲載の写真(第110図)もその配置と固定する糸の位置が同一であるが、ここでは仕切りを設けた木箱に収められている。木箱の外枠内側には段があり、嵌め込んで蓋をすることができるようになっている(菊田1933)。

ここで思い起こされるのが『伊達政宗欧南遣使考』の「匠氏ニ命シ、各桐匣ヲ製シテ、之ヲ盛り、玻璃ヲ嵌シテ、以テ毀損ヲ防キ、傍ラ観覧ニ便ニス」という記述である(平井1877)。この記述と上記の状態は合致する部分が多いことから、これらは1876(明治9)年の観覧を考慮した保存措置の状態を示している可能性が考えられる。

3 復原

1) これまでの成果と問題点

「ブラケット残欠」は、国の重要文化財に指定された当初は「少なくとも二箇分の断片」と考えられていた(財津1966)。しかし、2001(平成13)年に公表されたその復原によって、同一個体の残欠で、洗礼者聖ヨハネを表現しているものであることが明らかになった(仙台市博物館編2001)。同書では19世紀製の洗礼者聖ヨハネの同形態のブラケットを参考資料として併載し、それに基づき6片の写真を再配置している。

しかし、写真再配置の方法に課題がみられる。それはブラケットの基本形を灰色の長方形で示し、その上に6片を参考資料に基づき配置するというものである。6片は、相互に密着することは全くなく、隙間が認められる。このような写真配置方法では、各片の大まかな位置しか示すことができない。したがって、基本情報の一つである大きさ(寸法)の把握ができないという問題が生じる。また、図像の各部位との詳細な比較も困難になる。

2) 方法

破損して出土した遺物を復原するように残欠6片の糸での固定を解き、各片を直接接合して復原するのが最良である。しかし国宝に指定されている現状では難しい。そこで次善の方法として、ブラケットが鋳造品であることを踏まえ、大きさ、図像などがほぼ一致する欠損のないブラケットで、慶長使節と関りの深い世紀、すなわち16・17世紀に制作されたものをベースとし、その上に直接6片の写真を置いてみることにした^(註3)。

ただ、ここで注意しなければならないのは、各片の破断面の取扱いである。6片は一括して真上から撮影されたものではあるが、破断部分はレリーフ面に対してすべて直角であるわけではないため、破断面の一部が写っている箇所がある。接合復原はレリーフ面の復原ということになるから、レリーフ面以外の破断面は除去す



a. 復元された「ブラケット残欠」



b. 復元の基にしたブラケット〈洗礼者聖ヨハネ〉

第2図「ブラケット残欠」の復元

る必要がある。

このようにして復元したのが第2図aで、破損による若干の歪みは認められるものの、縦（長辺）102mm，横（短辺）72mmを測る。

3) 各片レリーフの状態

復元のベースとしたメトロポリタン美術館所蔵のブラケット（第2図b，第1表(2) No.48）と比較しながら，各片のレリーフの状態をみてみたい。破片aとbには特に著しい違いは認められない。ただbの二箇所（箇所）に亀裂がある。それは子羊の鼻先と右腕の間，そして右肘の後ろにある。

破片cとdは外縁の小片であることから，その違いを比較するのは難しい。

破片eは顔面部で，その輪郭の変形が著しい。最も窪んでいる部分の目，特に左目が辛う

じて残っている状態であるが，口・鼻・額・眉・顎・顎髭・口髭は平坦にされてしまい判別が難しい。頸部も平坦されている。なお，右顎付近に亀裂が認められる。

破片fは右手の甲と指に丸味がなく，平坦にされている。

4) 破損の方法

各片のレリーフの状態の比較観察によって，顔・顎・右手が平坦にされていることが明らかになった。特に顔面部は比較資料がなければ，それがどの部分なのかの判別さえも難しいほどである。それに比べると破片fの左腕や破片bの子羊と左手は比較資料との著しい違いはみられない。このような各片，各部位の状態から主に顔面部及びその周囲に打撃を加えて破損したものと考えられる。

第1表(1) 三重杵・鍔付き縦型長方形プラケット一覧

No	主 題	所 蔵	資料番号	素材	寸法 (mm)		鍔
					横	縦	
1	東方三博士の礼拝	MET	32.64.47	青銅	70	100	有
2	聖母子	NBK	—	真鍮	72	* 103	有
3	大工道具店のキリスト	MET	2012.545.1	青銅	71	102	有
4		V&A	A.37-1925	真鍮	72	102	無
5	ピエタ	MMA	2012.545.2	青銅	71	102	有
6		MET	32.64.48	青銅	71	100	有
7	聖セバスティアヌス	MET	2012.545.5	青銅	70	101	有
8		MET	60.55.72	青銅	71	102	有
9		MCBC	412A	青銅	71	102	有
10	聖ヒエロニムス	MET	1975.1.1359	銅合金	70	* 100	有
11		MET	60.55.71	青銅	73	103	無
12		V&M	A.32-1925	真鍮	72	103	有
13		MCBC	412B	青銅	72	103	有
14		AMUO	WA1909.150	青銅	6.7	9.6	無
15		IUAM	87.26.2.15	青銅	70	* 100	有
16	聖アシスクロと聖女ヴィクトリア	MCBC	412C	青銅	71	102	有
17	マグダラの聖女マリア	MET	2012.545.8	青銅	71	102	有
18		MET	32.64.49	青銅	71	102	有
19		MCBC	412D	青銅	70	100	有
20		IUAM	87.26.2.13	青銅	79	114	有
21		MNR	E.Cl.20015	青銅	71	114	無
22	聖ベネディクトウス	MET	2012.545.9	青銅	70	99	有
23	アッシジの聖フランチェスコ	MET	2012.545.10	青銅	71	102	有
24		MCBC	412E	青銅	71	100	有
25		V&A	A.46-1925	真鍮	69	98	有
26		NBK	—	真鍮	72	* 102	有
27	パオラの聖フランチェスコ	V&A	A.30-1925	真鍮	72	103	有
28	パドヴァの聖アントニウス	MET	2012.545.12	青銅	70	101	有
29	アルカラの聖ディエゴ	MET	2012.545.11	青銅	70	102	有
30	聖女ルキア	MET	2012.545.17	青銅	70	102	有
31	無原罪の聖母	MET	2012.545.4	青銅	71	101	有
32		MNB	881.B	青銅	73	103	有
33		MPV	P.V.10855	青銅	71	102	有
34		DM	—	青銅	70	* 100	有
35		TNM	C712	—	66	* 95	有
36		NBK	—	真鍮	72	* 103	有
37	受胎告知	MNB	479C	青銅	72.5	103	無
38	エッケ・ホモ	MET	2012.545.3	青銅	68	99	有
39		MCBC	410	青銅	71	102	有
40		NLG	5172	青銅	72	103	有
41		TNM	C-715	—	68	* 94	有
42		TNM	C1004	—	67	* 96	有

第1表(2) 三重杵・鍔付き縦型長方形プラケット一覧

No	主 題	所 蔵	資料番号	素材	寸法 (mm)		鍔
					横	縦	
44	エッケ・ホモ	TNM	C-1003	—	67	95	有
44		TNM	C713	—	68	* 98	有
45		TNM	C704	—	67	95	有
46	洗礼者聖ヨハネ	MET	2012.545.14	青銅	71	102	有
47		MET	32.64.50	青銅	68	97	有
48		MET	60.55.70	青銅	73	102	有
49		MPV	P.V.10854	青銅	70	98	有
50		MPV	P.V.10589/15	青銅	71	101	有
51	聖ペテロの悔悛	AMUO	WA1897.B864	青銅	72.3	102.7	有
52		MCBC	411A	青銅	71	103	有
53		MET	2012.545.15	青銅	71	102	有
54		V&A	A.41-1925	真鍮	69	98	有
55		MNR	E.Cl.20026	青銅	71	101	無
56		NBK	—	真鍮	71	* 100	有

所蔵機関略号 MET:メトロポリタン美術館, V&A:ヴィクトリア・アルバート博物館, MCBC:モリナリコレクション (ボードウィン・カレッジ), AMUO:アッシュモール博物館 (オックスフォード大学), IUAM:インディアナ大学美術館, MNB:国立バルゼジェロ博物館, DM:出津修道院, MLG:ラザロ・ガルディアノ博物館, MPV:ヴェネツィア宮殿博物館, MNR:国立ルネサンス博物館, TNM:東京国立博物館, NBK:南蛮文化館

註1. *は写真からの計測値 註2. 15は聖女フスタと聖女ルフィーナとする見解もある

この破損行為の時期については大槻玄沢の記録によって1812(文化9)年以前と考えられるが、それ以上のことは不明である。

5) 銘と図像の内容

破片aに「XIT MAIOR」, 破片eに「RE」の銘がみえる。これを復原すると「NON SVREXIT MAIOR」となる(第2図b)。これはすでに指摘されているように、ラテン語訳の『マタイによる福音書』11章11節に対応する(仙台市博物館編2001)。すなわち、「Amen dico vobis: non surrexit inter natos mulierum maior Iohanne Baptista, qui autem minor est in regno caelorum maior est illo. (はっきり言うておく。およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である)」(Kinney 2013, 共同訳聖書実行委員会1990, 下線は筆者追加)で、下線部がプラケットの銘に対応する。

図像についてみてみよう。口髭・顎鬚を蓄え、頭髮は長く肩付近まで伸びている。動物の

毛衣を身にまとい、腰に紐を巻いている。右手を胸に当て、左手に書物を持ち、その上に子羊が跪く。左腕で棒状の細長い十字架を腋腹に押さえている。十字架の縦棒と横棒の交差付近から小旗が揺らめいている。

動物の毛衣とそれに巻いた腰紐は『マルコによる福音書』1章6節及び『マタイによる福音書』3章4節の「ヨハネはらくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野密を食べていた」に対応する。すなわち、荒野で隠遁生活をするヨハネ(『ルカによる福音書』1章80節)を図像化したものである。また子羊は『ヨハネによる福音書』1章29節の「その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。『見よ、世の罪を取り除く神の子羊だ。』」に対応する。棒状の細長い十字架はヨハネのアトリビュート(持物)の一つである葦で作った十字架である。

6) 成果

従来の方法を改めて検討した結果、新たな事項を含むつぎの三点を明らかにできた。第一点

は、「プラケット残欠」の主題は、すでに指摘されていたとおり洗礼者聖ヨハネであることが再確認できたことである。第二点は大きさの把握である。すなわち、縦（長辺）102mm、横（短辺）72mmと復原できたことである。第三点は破損行為における中心的な打撃箇所が顔面部とその周囲であることを明らかにしたことである。これは破損行為の目的を知る手掛かりの一つになると思われる。

4 プラケットの基礎的理解

1) プラケットとメダル

慶長資料の指定名称「メダイ残欠」は復原した結果、「プラケット残欠」であることが明らかとなった。また、東京国立博物館ではプラケットを「牌」と和訳し、英語では「Medallion」と表記している。このことから、日本では公的呼称に統一性がなく、かつメダルの範疇で理解されていることがわかる^(註4)。

メダルとプラケットの故地ヨーロッパでは両者を明確に区別している。メダルは一般的に金属製で手のひらサイズかそれよりも小さな円盤状を呈し、鑄造あるいは刻印したものである。多くは銅合金であるが、鉛・銀・金であることもある。また、メダルは表裏二面からなり、表面に肖像とその周囲を銘で取り囲み、裏面に寓意や紋章を配することが多い（Flaten2012）。

ルネサンス期のメダルは古代ローマの硬貨を基本にして制作された。1438年にイタリアのメダル作家アントニオ・ピサネッロ（1395頃～1455）が制作したビザンティン帝国皇帝ヨハネ八世パレオロゴスのメダルが最初のものとされる（Scher1996）。

一方、プラケットについてはつぎのように説明されている（Lewis1996）。すなわち、持ち運びできる金属製—通常は青銅—レリーフ製品（作品）で、手に収まるほどの大きさである。緑青か鍍金がみられる。片面だけに神話やキリスト教の図像から採られた人物像などが表現され、肖像や銘は例外的である。反対の面はレリーフの凹凸のままか平坦に処理するだけで、

図像や銘などはみられない。形態も多様で長方形・円形・楕円形・台形・楕形などがある。プラケットは聖器の装飾・個人礼拝・芸術家の手本などに使用され、その用途は多様である。なお、プラケットという言葉は1860年代にフランスで創案された術語である。

プラケットは1440年代と1450年代にローマで古代ギリシア・ローマの貴金属装身具からの複製鑄造品として大量に制作されるようになった。その先駆者としてピエトリ・バルボ（後の教皇パウルス二世）がいる。バルボは1455年にローマに青銅鑄造所を設けて自身で制作した。

このようにメダルとプラケットをみると、形態・用途・出現時期・表現内容・表現方法などに違いがあることが指摘できる。

なお、メダリオンは一般に2～5世紀に造られた古代ローマの贈呈用大型メダルをいう。この語はルネサンス期以降の大きなメダルにやや不正確に使用されているという指摘がある（Scher1996）。

2) プラケットの成立と展開

ここではイタリアをルイス（Lewis1996）、アルプス山脈の北側をウェーバー（Weber1976）の見解に基づき、概観してみたい。プラケットの成立と展開はまずイタリアでみられ、1440年代・1450年代にローマで大量に制作され始めた。この時期の信心具としてのプラケットには聖母子像が表現されていた。15世紀第3四半期のプラケット制作の中心地はローマとマントヴァであった。15世紀第4四半期から16世紀第2四半期ごろまでウルビーノ・ミラノ・ボローニャ・マントヴァ・ヴェローナ・ヴェネツィアにプラケット作家が輩出した。イタリアのプラケット制作はローマ以北、特にイタリア北部を中心に展開したといえる。

アルプス山脈の北側のプラケット制作はイタリアからの影響を受けて16世紀初期に始まり、貴族階級の食器類・宝石箱・化粧室用具・小祭壇などを飾った。制作の中心地はドイツ南部のニュルンベルクとアウグスブルクで、16世紀末には後者が優勢になった。1600年頃、神聖ロー



a. 〈カエサル〉15c 中



b. 〈ディオニュソス〉15c 末



c. 〈バックス神の巫女〉15c 末

第3図 三重枠・鍔付き縦型長方形プラケットの淵源

マ帝国皇帝ルドルフ二世の宮廷が置かれたプラハはヨーロッパ芸術の中心であった。このような状況下でプラハでもプラケットが制作された。

オランダとフランスで本格的にプラケットが制作されるようになるのは16世紀第3四半期以降である。特に16世紀末、オランダはドイツ南部に対抗する有力な勢力になった。

スペインでは、16世紀から17世紀の極めて限定される時期まで、プラケットを自ら制作することはほとんどなかった。スペインのものとされるプラケットは信心用小像の役割を果たしていた。スペインはヨーロッパのさまざまな種類のプラケット制作の影響を受けたが、それは長期にわたるものではなかった。

5 三重枠・鍔付き縦型長方形プラケット

1) 外形の特徴

慶長資料の「プラケット残欠」は洗礼者聖ヨハネの半身像をレリーフで表現したものであった。聖ヨハネ半身像は縦型長方形の三重の額縁状枠のなかに表現されている。その枠は外側から内側に向かって低くなり、その幅は外側と内側が幅広く、両者に挟まれた真ん中は狭い。また多くの場合、プラケット本体と一体鋳造され

た吊り下げ用の鍔が付く。三重の額縁状枠と一体鋳造の吊下げ用の鍔がこのプラケットの外形的な特徴といえる。以下、本稿では前者を「三重枠」、後者を「鍔」と省略して仮称する。

なお、表現されているレリーフが同一あるいは酷似しているが「鍔」がないものが客体的に存在する。本稿ではこれらを亜類として捉え、分析の対象に加えることにする。

2) 淵源

外形的な特徴である「三重枠」と「鍔」に類似する有孔突起を有するプラケットの淵源を地域と年代の視点で検討してみたい。この二つの要素を共に有し年代的に最も遡る作品の一つと考えられるのがイタリア国立バルジェロ博物館所蔵の〈カエサル〉のプラケット(資料番号223B)である(第3図a, Giuseppe Toderi & Fiorenza Vannel Toderi 1996)。これはフィレンツェ生まれの彫刻家で建築家のアントニオ・フィラレーテ(1400頃～1469頃)の作品で15世紀中頃の年代が与えられている。カエサルの半身像で「IVLIVS CAESAR」の銘がある。吊下げを意図した突起は、根本で紐を撚り合せたように振じって鍔状にデザインされたレリーフで飾られ、その中央部が凹んでいる。鉄製で縦169.5mm、



a. 東方三博士の礼拝〔1〕



b. 聖母子〔2〕



c. 大工道具店のキリスト〔3〕



d. ピエタ〔6〕



e. 聖セバスティアヌス〔7〕



f. 聖ヒエロニムス〔10〕



g. 聖アシスコロと聖女ヴィクトリア〔16〕



h. マグダラの聖女マリア〔17〕



i. 聖ベネディクトゥス〔22〕



j. アッシジの聖フランチェスコ [23]



k. パオラの聖フランチェスコ [27]



l. パドヴァの聖アントニウス [28]



m. アルカラの聖ディエゴ [29]



n. 聖女ルキア [30]



o. 無原罪の聖母 [31]



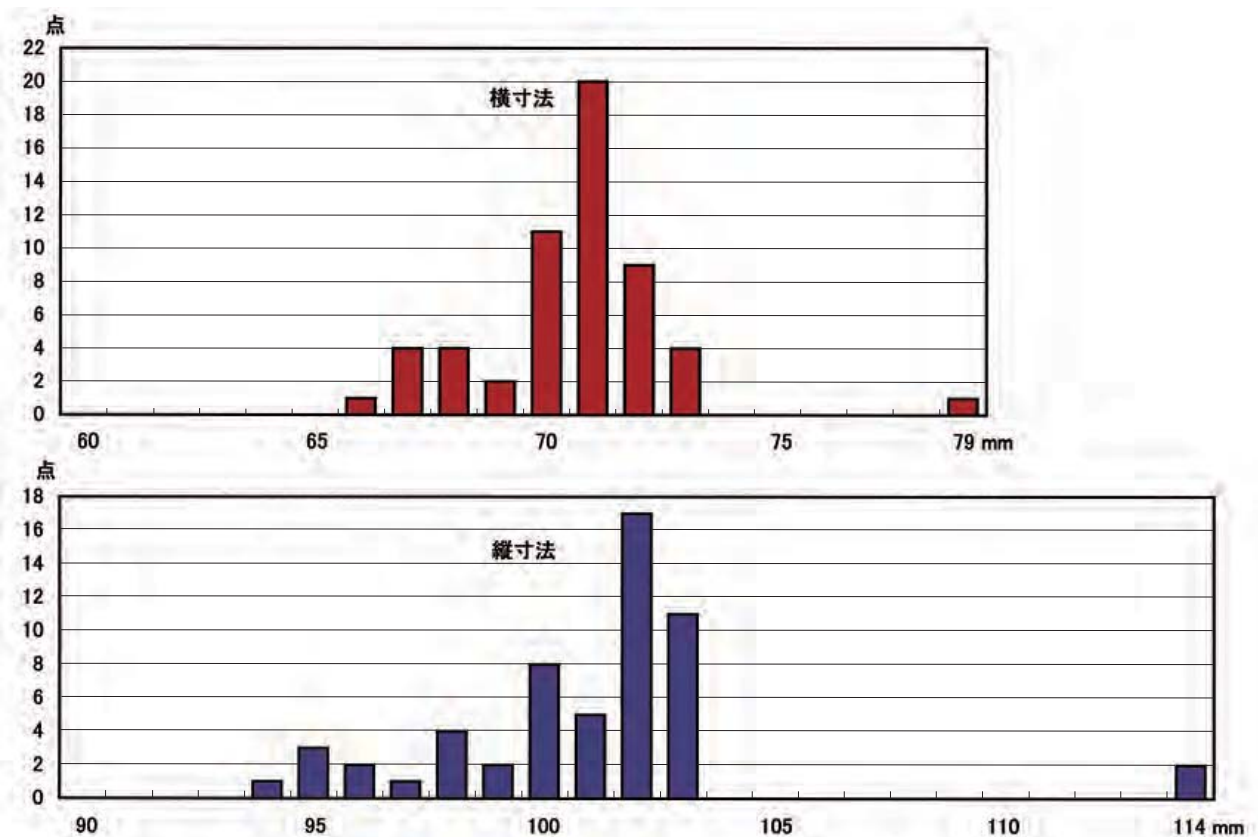
p. 受胎告知 [37]



q. エッケ・ホモ [38]



r. 聖ペテロの悔悛 [53]



第5図 三重杵・鍔付き縦型長方形ブラケットの縦横寸法の分布

横117.5mmである。

〈カエサル〉のブラケットは「三重杵」と吊下げ用突起を有しているが、「ブラケット残欠」よりも大きさでかなり上回り、素材も青銅ではなく鉄であることが異なる。そこで「ブラケット残欠」と同程度の大きさで、青銅製であることを条件に加えると、バルジェロ博物館所蔵の〈ディオニュソス〉(資料番号269B, 第3図b)と〈バッカス神の巫女〉(資料番号265B, 第3図c)を合致例として挙げることができる。大きさは、前者が縦110.5mm×横88.8mm, 後者が縦110mm×横87mm, 時期は共に15世紀末で、作者は不明である。制作地はフィレンツェで、この2点是一对の作品である(Giuseppe Toderi & Fiorenza Vannel Toderi 1996)。しかし、吊下げ用突起は鍔状を呈さず、前者は丘陵状に緩やかに盛り上げ、後者はD字を伏せたような突起を作り、そこにそれぞれ穿孔している。

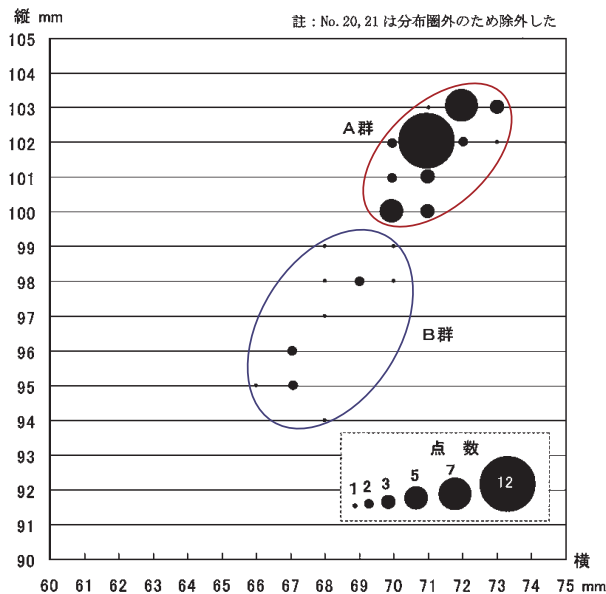
ドイツ南部で制作された作品で、吊下げ用の有孔突起を欠くが、他の条件が合致する例

としてボードンウィン・カレッジ、モリナリ・コレクションの〈キリスト磔刑像〉(資料番号1976.20.50)を挙げることができる。年代は16世紀第4四半期で、大きさは縦110mm×横83mmである。上部に孔が開けられているが、その時期は不明である(註5)。

このように見てくると、吊下げ用有孔突起を有する三重杵縦型長方形ブラケットはイタリアでのブラケット成立時期にすでに存在し、吊下げ用有孔突起を欠くものの、それに代わる孔を有する例はドイツ南部でも16世紀第4四半期には制作されていたことがわかる。

3) 規格性と主題の包括的な共通性

「ブラケット残欠」の外形的な特徴は「三重杵」と「鍔」である。「鍔」は前述の〈カエサル〉〈ディオニュソス〉〈バッカス神の巫女〉の穿孔された吊下げ用突起とは形態が異なり、文字通り円形の金属の輪である。そこで「三重杵」と「鍔」を有する縦型長方形ブラケット及びそのブラケットと同一あるいは酷似するレリーフ



第6図 三重枠・鍍付き縦型長方形プラケットの縦横寸法の相関分布

を有するが「鍍」のない「三重枠」の縦型長方形プラケットを収集し、その特徴の把握を試みることにした。このようにして収集したプラケットをまとめたのが第1表である。前者が主体で後者は客体であり、その総数は56点を数える。このなかから主題別に例示したのが第4図である。

第1表に基づき、0.1mm以下を四捨五入して、縦と横の寸法分布を示したのが第5図である。横寸法は1点が、縦寸法では2点が、それぞれ分布圏から大きく外れていることがわかる。そこで、この2点（第1表のNo.20, 21）を除く54点を対象に縦横寸法の相関関係を見た。それが第6図である。この図から寸法分布に明らかな違いが見出せる。すなわち縦100～103mm、横70～73mmと縦94～99mm、横66～70mmのグループである。ここでは前者をA群、後者B群とする。A群は41点（75.9%）、B群は13点（24.1%）で、A群が4分の3強を占め、縦横寸法の主体であることがわかる。特に縦102mm×横71mmは12点（22.2%）と他を凌駕しており、これが代表的・中心的な寸法であることがわかる。

プラケットは鋳造品である。したがって、同一レリーフでも、原型から鋳型を作りそれに

よって鋳造された品や出来あがった鋳造品を鋳型に押しつけ型をとって鋳造する「踏返し」による品、さらに再「踏返し」が複数回行われた品があることが想定できる。また、これらに部分的に手を加えたものや模刻した型から鋳造したものなどの存在も考えられる。すなわち、原型の鋳型を第一段階とすると、そこから数段階経た鋳造品の存在も考えられるということである。

本稿ではこれらを厳密には区別することなく同一・酷似のレリーフを一括して扱っている。収集したプラケットの縦横の寸法に幅が生じたのは、上記のようなさまざまな段階のものが含まれていることが大きな要因と考えられる。各段階のものの混在が予測される第6図のなかで、A群—とりわけ代表的・中心的な12点—には原型の鋳型で作られた第一段階の品が多く含まれている可能性が高いと考えられる。

三重枠・鍍付き縦型長方形プラケットを収集した結果、レリーフの主題が、キリスト教に関するものであることで包括的に共通していることが確認できた（第1表）。外形的に類似する例として提示した〈カエサル〉〈ディオニュソス〉〈バッカス神の巫女〉は歴史やギリシア・ローマ神話に主題を採ったものであり、これらとは主題が異なるのである。

4) 型式とシリーズ

三重枠・鍍付き縦型長方形プラケットは、その大きさも一定のまとまりを示していることから規格性を有していると考えられる。また、レリーフの主題もキリスト教に関わるものに限られているので、その包括的な共通性も認められる。このようなことから、三重枠・鍍付き縦型長方形プラケットはプラケットのなかの一型式として存在していると理解できよう。

さらに、主題の包括的な共通性を踏まえて、具体的に主題を見てみると、19種を数えることができる（第1表）。これはそれぞれ個別に制作されたというよりも同一型式内のヴァリエーションとして制作されたと理解するほうが合理的である。たとえば、第1表から明らかなよう

に縦102mm×横71mmの大きさの主題は〈大工道具店のキリスト〉〈ピエタ〉〈聖セバスティアヌス〉〈聖アシスクロと聖女ヴィクトリア（聖フスタと聖女ルフィーナか）〉〈マグダラの聖女マリア〉〈アッシジの聖フランチェスコ〉〈無原罪の聖母〉〈エッケ・ホモ〉〈聖ペテロの悔悛〉であり、一つの主題に収斂しない。このことは、シリーズとして制作されたことを示すものと考えられる（Weber1976）。

5) 主題とグルーピング

三重枠・鍔付き縦型長方形ブラケットの主題は上述のようにキリスト教に関するものであるが、ウェバーはこれをつぎの4グループに分類できるとした（Weber1975）。すなわち、①キリストの生涯の三場面—〈東方三博士の礼拝〉〈大工道具店のキリスト〉〈ピエタ（キリストの哀悼）〉、②12名の聖人立像の一群^{（註6）}、③全身像の〈無原罪の聖母〉、④半身像の〈エッケ・ホモ〉〈洗礼者聖ヨハネ〉〈聖ペテロの悔悛〉である。これに〈聖女ルキア〉と〈受胎告知〉を加えるべきであるという指摘がある（Warren2014）。具体的には〈聖女ルキア〉を②に、〈受胎告知〉を①に加えることだと理解できる。さらに、①に〈聖母子〉を加えることができる^{（註7）}。

6) 制作地域と年代

制作地域と年代について、ウォレンが研究史的な視点でまとめている（Warren2014）。そこで、ここではその成果に基づき研究の現状を見てみたい。この一群のブラケットについて最初に研究したのはエドモンド・ヴィルヘルム・ブラウンで、16世紀後期のスペイン製であるとした（Broun1921）。ただ、ブラウンは「踏返し」の存在も認識していたから、すべてをそのように理解していたわけではなかった。ブラウンの制作地域に関する見解は大方の研究者の支持を得た。

一方、クラウス・ペヒシュタインは〈東方三博士の礼拝〉の改作を論じるなかで、〈聖ペテロの悔悛〉とメヘレン（ベルギー）のアラバスター製レリーフと

の密接な関係を指摘し、オランダの工房で輸出用に制作され、スペインその他の地へ輸出されたものであろうとした（Pechstein1968）。

ウォレンの制作地域に関するまとめを読むとスペイン説とオランダ説があることがわかる。ただ後者の場合でも受入れ地で「踏返し」が行われたことを勘案すれば、制作起源地域がオランダということであり、オランダだけで制作されたとは言い切れないことになる。

ウォレンは制作年代の検討する際に1590年に作成された北イングランドのラムリー城のラムリー卿ジョンの「大理石と大理石柱で飾られたキリスト、聖母、聖人の真鍮製小肖像」67点の目録に注目した。その理由として現在検討の対象としているシリーズと①〈東方三博士の礼拝〉〈受胎告知〉〈聖アシスクロと聖女ヴィクトリア〉を除いて一致すること、②この目録との関係が密接であったと考えられることの二点を挙げている。このことから、このシリーズは本来、極めて多くの数からなり、1590年以前あるいは1590年頃の年代を与えられるだろうとする。

ウォレンの制作年代に関する見解は上限年代として概ね支持できる。このブラケットのシリーズのなかに〈アルカラの聖ディエゴ〉（第4図(2)m）があることがその理由である。レリーフにはフランシスコ会の修道服と三つの結び目がある腰紐、大きな十字架、修道服の裾のなかの花（バラ）、パンをもつ子どもが表現されていることからアルカラの聖ディエゴ（1400頃～1463）と判断できる。アルカラのディエゴはローマ教皇シクストゥス五世によって1588年に列聖された。したがって、このブラケットはそれ以降の制作といえる。また、このブラケットがシリーズの一つとして制作されたことを考えれば、シリーズとしての年代の上限もこの近辺に求めることができる。

一方、下限年代については、メダルでは認められるが、この型式のブラケットでは確認できない聖人が手掛かりを与えてくれる。それは1610年に列聖された聖カルロ・ボッロメオ、1622年に列聖された聖イグナティウス・デ・ロヨラ、聖フランシスコ・ザビエル、聖フィリッ

ポ・ネリの四聖人である^(註8)。

メダルは縦型の楕円形で、長軸・短軸が30mmを超えるもの(大型)と超えないもの(小型)とがある。大型の例として聖イグナチオ・デ・ロヨラと聖フランシスコ・ザビエルの図像が表裏に認められる長崎・日本二十六聖人記念館所蔵のメダルがあり、17世紀とされている(伊藤1999)。しかし、列聖年を考慮すれば1622年以降の17世紀と限定するのが妥当であろう。また、ロヨラ、ザビエルと同年に列聖された聖フィリッポ・ネリについては1640年銘のメダルがある(Fraten 2012)。小型の例として神戸市立博物館所蔵の聖イグナティウス・デ・ロヨラのメダルを挙げることができる(大分県立歴史博物館編2015)。

既述したように、このブラケットのシリーズでは、上記四聖人の図像を確認できない。このことは17世紀初期に列聖された聖人の図像がないことを意味しており、下限年代が17世紀初期以前である可能性が高いと理解できる^(註9)。

このように最初期の制作年代を16世紀末～17世紀初期とすることができ、これは大方の研究者の見解と一致する。しかしそれ以降、20世紀まで「踏返し」を重ねて複製されたことにも留意しておかなければならない。

6 日本における三重杵・鍔付き縦型長方形ブラケットの様相

1) 伝来・出土

管見では11点、確認でき、その主題は〈無原罪の聖母〉(第4図(2) o) 〈エッケ・ホモ〉(第4図(2) q) 〈洗礼者聖ヨハネ〉(第2図 b) である。〈無原罪の聖母〉は①出津修道院所蔵品1点(長崎県指定有形文化財)^(註10)、②東京国立博物館所蔵品2点(国指定重要文化財、東京国立博物館編2001)の3点、③平戸市生月町博物館・島の館1点である。①は1968(昭和43)年に長崎県外海町(現、長崎市外海町)で発見されたものである(片岡1969)。②には長崎奉行所旧蔵品(奉行所保管)の板踏絵として使用され、縦252mm、横190mm、厚さ41mmの松板

に嵌め込まれたもの(C712)と長崎奉行所旧蔵品(宗門蔵にて保管)、すなわち禁教令以後に没収されたもの(C706)とがある。C706は日本製かとされている。聖母を取り巻く光背(アウレオーラ)と結び目のある紐が東洋的な雲に改変されていることからすると、その指摘は首肯できる。③はご神体として祀られていたもののようである。

〈エッケ・ホモ〉6点は東京国立博物館所蔵品である。このうちC715、C1004、C1003、C713の4点は長崎奉行所旧蔵品(奉行所保管)のもので、縦245～252mm、横188～192mm、厚さ39～45mmの松・樺・イヌ楨の板に嵌め込まれており、板踏絵として使用されたことがわかる。ただ、C713には四隅に円形の突起があり、他の3点とは僅かに異なる。

〈洗礼者聖ヨハネ〉は慶長資料に含まれる1点(残欠)だけである。

2) 様相—メダル及び鍔付き楕円形ブラケットとの比較—

三重杵・鍔付き縦型長方形ブラケットはシリーズとして16世紀末～17世紀初期に制作が始まった。このブラケット・シリーズのなかで日本にもたらされたのは〈無原罪の聖母〉〈エッケ・ホモ〉〈洗礼者聖ヨハネ〉であった。ここ

第2表 16世紀後期～17世紀初期メダルの主題
(『キリシタン考古学—キリシタン遺跡を掘る』により作成)

表	裏
無原罪の聖母	マリアへのお告げ、苦行するマグダラの聖女マリア、アッシジの聖フランチェスコ、モンセラトの聖母子、聖ヒエロニムス、聖ロクス、聖ライムンドゥス、洗礼者聖ヨハネ、聖カルロ・ボッロメーオ、福音記者聖ヨハネ、エジプトへの避難、大天使聖ミカエル、ロザリオの聖母、聖アントニウスと傍らで跪くロバ、磔刑、救世主+HIS+3本の釘
聖母子	キリスト、磔刑、ヴェロニカ、大天使聖ミカエル
マリア	キリスト
天使聖体礼拝	銘: LOV VADO SE IA O SANCTISSINO SACRAMENTO

では同時期の日本にもたらされたメダルと吊下げ鍔付き楕円形ブラケットの主題との比較を行うことによって、三重杵・鍔付き縦型長方形ブラケットの日本における様相の把握を試みてみたい。

日本における16世紀後期～17世紀初期のメダル（伝来品・出土品）の主題（第2表）をみると〈無原罪の聖母〉との組合せが最も多く、そこには聖人も見られる。この他に聖母・聖母子・キリストを主題に例もある。つまり、聖母・聖母子・キリストを基本にして、そこに諸聖人等が組合せられるという様相が読み取れる。

鍔付き楕円形ブラケットの主題は二つに大別できる。第一類は主題・表現方法が三重杵・鍔付き縦型長方形ブラケットと基本的に同じで、それを楕円形に収まるようにしたものである。表現する面積が少ないため四隅が省略される場合がある。この類には〈聖セバスティアヌス〉〈パドヴァの聖アントニウス〉〈エッケ・ホモ〉〈無原罪の聖母〉などがある。第二類は主題あるいは表現方法が三重杵・鍔付き縦型長方形ブラケットに見られないものである。主題が見られないものとして〈ロザリオの聖母〉〈聖痕を受けるアッシジの聖フランチェスコ〉、主題は同じであるが表現方法が異なるものとして〈ピエタ〉がある。

このうち日本で確認できるものは第一類の〈無原罪の聖母〉5点^(註11)と第二類の〈ロザリオの聖母〉6点^(註12)〈聖痕を受けるアッシジの聖フランチェスコ〉2点^(註13)である。点数からみると〈無原罪の聖母〉〈ロザリオの聖母〉が主体で、〈聖痕を受けるアッシジの聖フランチェスコ〉2点のみであることから客体であることが窺える。

三重杵・鍔付き縦型長方形ブラケットの〈無原罪の聖母〉の「聖母」は16世紀後期～17世紀初期の日本におけるメダルや鍔付き楕円形ブラケットの代表的な主題と共通する。また〈エッケ・ホモ〉はキリスト像の一形態であり、これもメダルの代表的な主題である「キリスト」と共通する。ただ〈洗礼者聖ヨハネ〉は1点であり、前二者とは別に考える必要があろう。

3) 選択と役割

三重杵・鍔付き縦型長方形ブラケットはシリーズとして制作され、その主題は少なくとも19を数える（第1表）。そのなかで日本にもたらされ複数点現存しているのは〈無原罪の聖母〉と〈エッケ・ホモ〉であった。これは19の主題があるなかで二つの主題だけに集中していることを示している。この状況は偶然や任意ではなく選択の結果と理解するのが最も妥当であろう。主題がキリスト教の根幹すなわち「聖母」と「キリスト」に関っていることも選択の理由に加えることができる。しかし〈無原罪の聖母〉と〈エッケ・ホモ〉が選択された理由と結果の説明はこれだけでは不十分である。

このシリーズで「聖母」と「キリスト」に関わる主題を有しているのは、〈無原罪の聖母〉（第4図(2)o）と〈エッケ・ホモ〉（第4図(2)q）だけではない。この他に「聖母」に関する主題としては〈東方三博士の礼拝〉（第4図(1)a）、〈聖母子〉（第4図(1)b）、〈ピエタ〉（第4図(1)d）、〈受胎告知〉（第4図(2)p）があり、「キリスト」に関しては〈東方三博士の礼拝〉〈聖母子〉〈ピエタ〉〈大工道具店のキリスト〉（第4図(1)c）がある。つまり「聖母」と「キリスト」に関わる主題は〈東方三博士の礼拝〉〈聖母子〉〈ピエタ〉〈大工道具店のキリスト〉ということになる。そこで〈無原罪の聖母〉〈エッケ・ホモ〉と〈東方三博士の礼拝〉〈ピエタ〉〈大工道具店のキリスト〉との表現形態を比較すると、前二者は単独像であるが、後三者は複数像であることがわかる。つまり前二者は礼拝対象が単独であり、焦点化しやすいということになる。これが「聖母」と「キリスト」の主題を有するブラケットのなかから〈無原罪の聖母〉と〈エッケ・ホモ〉を選択した理由と考えられる。

さらに〈無原罪の聖母〉と〈エッケ・ホモ〉を選択した理由として素材を挙げることができる。日本にもたらされたブラケットの素材の多くは青銅であり、同時期に多くもたらされたと考えられる版画と比べれば、制作点数・費用・重量・厚さで格段の差が生じることは容易に想像できる。たとえば、このシリーズのブラケッ

第3表 福井で発見された切支丹銅版画（東京国立博物館所蔵）の主題と年代

（『東京国立博物館図版目録 キリシタン関係遺品篇（増補改訂版）』に加筆して作成）

番号	主 題	刊行者（生没年）	版刻者（生没年）	欄外・裏面などの墨書
46	聖母子図	Thomas de Leu (1560～1612)	—	—
47	聖母子図	Jean le Clerc (1586～1633)	—	バるほうへまいる そう ゑつ
48	童形キリスト受難表象図	Thomas de Leu (1560～1612)	Pierre Firems (1580? ～1638)	—
49	最後の晩餐図	Nicolas de Mathonière (1573～1640)	—	—
50	十字架上のキリスト図	Jean le Clerc (1586～1633)	Leonard Gaultier (1561～1635以降)	—
51	十字架上のキリスト図	Thomas de Leu (1560～1612)	Thomas de Leu (1560～1612)	—
52	聖骸降下図	—	—	左平次 半十 あんとに よさままいる
53	聖霊降臨図	Nicolas de Mathonière (1573～1640)	—	—
54	審判の天使図	—	—	—
55	聖三位と聖家族図	—	—	—
56	聖ドミニクス図	Jean le Clerc (1586～1633)	—	サントとみんこ
57	聖ニコラウス図	Jean le Clerc (1586～1633)	Leonard Gaultier (1561～1635以降)	サンにこらす 市十さま まいる
58	聖バルトロメオ図	Jean le Clerc (1586～1633)	GH	—
59	聖ヒアキントゥス図	—	—	—
60	聖ヒアキントゥス図	—	Jean Picart *	サンシャント へんつら うさま まいる
61	聖ベルナルディ図	—	—	—
62	聖ラウレンティウス図	Nicolas de Mathonière (1573～1640)	BF	サンロれんす さるわ とゝるへ ろれんす□□ かたミニこし候
63	聖女エウフェミア図	—	Thomas de Leu (1560～1612)	サタゑううへみや あん と
64	放蕩息子豚飼い寓話図	Jean le Clerc (1586～1633)	—	さんあんと とつ八
65	聖女ユスティナ図	—	Thomas de Leu (1560～1612)	サタふしぢいな あんと

* Jean Picart の生没年は未確認であるが、1626年、1629年、1631年に制作した作品がある。

ト1枚の重量は110～150gであり^(註14)、厚さは5mm前後と考えられるから、紙に印刷した版画1枚との重量・厚さの差は歴然としている。

しかし、日本のキリシタンが聖母やキリストばかりでなく諸聖人の画像も求めていたことは宣教師の書簡等からわかる(五野井2006)。この状況を窺わせる一例として福井で発見された切支丹銅版画20点(東京国立博物館所蔵)がある(第3表)。年代は16世紀末～17世紀初期であり、三重杵・鍔付き縦型長方形ブラケットとほぼ同時期といえる。この銅版画20点の主題を見ると聖母・キリストに関わるものが8点、聖人が9点あり、後者のうち聖人名が仮名で墨書されているものが5点ある。聖母やキリストばかりでなく聖人も信者に知られ信仰・礼拝の対象になっていたことが知られる。

以上のことから、シリーズとして制作されたブラケットのなかから、〈無原罪の聖母〉と〈エッケ・ホモ〉が選択された理由としてつぎの三点が考えられる。すなわち①「聖母」と「キリスト」の単独像であること、②素材が金属—主に銅合金—であり、制作点数・費用・重量・厚さで紙素材の版画とは格段の差があること、③聖人像は版画等の絵画で補完したことである。また〈無原罪の聖母〉と〈エッケ・ホモ〉の役割としては、その素材が金属であることから、キリスト教の根幹である「聖母」と「キリスト」の信仰及び宣教のための安定した道具であったことが考えられる。

7 プラケット残欠〈洗礼者聖ヨハネ〉の歴史的意義

1) 特筆事項

「プラケット残欠」の主題は〈洗礼者聖ヨハネ〉であり、それはシリーズとして制作された三重杵・鍔付き縦型長方形ブラケットの一つであった。吊下げ鍔を除く大きさは、縦102mm、横72mmに復元でき、これはこのシリーズのブラケットの主体を占める大きさ(第6図A群)の代表的・中心的な数値に近い。制作年代は16世紀末～17世紀初期とされ、最初期の制作地はオ

ランダで、そこからスペインをはじめとするヨーロッパ各地に輸出されたと考えられている。しかし輸出先等での「踏返し」を考えると、すべてをオランダ製ということは難しい。

同シリーズの〈無原罪の聖母〉と〈エッケ・ホモ〉が日本で複数点確認できるのに対して、〈洗礼者聖ヨハネ〉は慶長資料のなかに1点確認できるだけであることが注目される。

慶長資料のなかには、この他に鍔付き楕円形ブラケット〈ロザリオの聖母〉があるが、これは日本にも複数点存在し、しかも主題が「聖母」であることから、基本的には〈無原罪の聖母〉と〈エッケ・ホモ〉と同じ範疇で捉えることができよう。

2) 慶長使節との関係

慶長資料に含まれるブラケット〈洗礼者聖ヨハネ〉は16世紀末～17世紀初期にシリーズの一つとして制作されたものであった。また同シリーズの〈無原罪の聖母〉と〈エッケ・ホモ〉が日本では複数点確認できるが、〈洗礼者聖ヨハネ〉はこの1点だけである。このことから慶長使節と〈洗礼者聖ヨハネ〉の関係を考える必要が生じる。

伊達政宗が建造し太平洋を二往復した慶長使節船のスペイン語の船名はサン・ファン・バウティスタ(Sant Juan Bautista)であった。これは1617年3月13日付のスペイン国王フェリペ三世宛ヌエバ・エスパーニャ副王グアダルカサル侯書簡に、①サン・ファン・バウティスタ号がティントケ湾^(註15)に到着したこと、②この船は2年前にスペイン国王の贈物を日本の国王に届けるためにアカプルコを出帆したことなどが記されている(仙台市史編さん委員会編2010)。サン・ファン・バウティスタは洗礼者聖ヨハネのことであるから、使節船名を日本語で表記すると「洗礼者聖ヨハネ号」となる。

使節船サン・ファン・バウティスタ号は1613年10月、仙台領月ノ浦を出帆し、約3ヵ月を要して太平洋を横断しアカプルコに到着した。この航海は「大嵐や時化を乗り切り」成し遂げたものであった(石鍋・平田2010)。また1615年

4月にアカプルコから日本に向けても「大変難儀な航海で、辛うじてかの地へ入港することができた」のであった（仙台市史編さん委員会編2010）。さらに1617年3月に日本からアカプルコに再び入港した同船は「きわめてひどく損傷」していたのである（仙台市史編さん委員会編2010）。このように、3・4ヵ月を要する当時の太平洋横断航海は命懸けであり、死と紙一重の極めて危険なものであった。したがって、船長を始めとする船員・乗船者が第一に望むことは平穏な航海であり、目的港に無事に着くことであったことは容易に想像できる。〈洗礼者聖ヨハネ〉のプラケットが使節船名と同一^{（註16）}であるということから、それが航海の安全を祈る対象として存在していたことが、まず考えられる。

つぎに、〈洗礼者聖ヨハネ〉のプラケットが仙台藩切支丹所の「預物」の一つであることに注目すると、支倉常長との関りが浮かび上がってくる。つまり、〈洗礼者聖ヨハネ〉のプラケットは支倉常長が航海の安全を祈るために所持していた蓋然性が高いということである。しかし、このプラケットを、月ノ浦を出帆する際にすでに所持していたとは考え難く、メキシコ（ノビスパニア）・スペイン・ローマを旅するなかで、入手したとするのが至当であろう。

慶長資料の〈洗礼者聖ヨハネ〉のプラケットは、それが使節船名と同一であることから、第一義的には航海の安全を祈るためのものであり、ほぼ同時期に日本にもたらされた同シリーズの〈無原罪の聖母〉と〈エッケ・ホモ〉の役割とは異なると考えられる。

8 まとめ

本稿では国宝「慶長遣欧使節関係資料」の「プラケット残欠」について基礎的な検討を行った。その結果はつぎの①～⑤にまとめることができる。

①三重杵・鍔付き縦型長方形プラケットに属するもので、主題は〈洗礼者聖ヨハネ〉である。大きさは吊下げ鍔を除き、縦102mm、横72mm

と復元でき、同類プラケットの標準的な大きさである。顔面部を中心に打撃が加えられた結果、破損したものである。

②三重杵・鍔付き縦型長方形プラケットは16世紀末～17世紀初期に最初オランダでシリーズとして鑄造され、スペインをはじめとするヨーロッパ各地に輸出された。輸出先等で「踏返し」等が行われたことから、制作地域をオランダに限定することはできない。

③このシリーズの主題は少なくとも19を数え、日本には単独像で表現されている〈無原罪の聖母〉と〈エッケ・ホモ〉がもたらされた。これは選択された結果と考えられる。

④日本に遺存するこのシリーズの〈洗礼者聖ヨハネ〉のプラケットは慶長資料の1点のみである。

⑤〈洗礼者聖ヨハネ〉のプラケットは慶長使節船名と同一であること、また仙台藩切支丹所の「預物」の一つであることから、支倉常長がメキシコ（ノビスパン）・スペイン・ローマを旅するなかで、航海の安全を祈るために入手した蓋然性が高いと考えられる。

本稿を執筆するにあたり、資料の借用・調査並びに文献の提供・閲覧等でつぎの個人・機関に協力をいただいた。記して感謝の意を表したい（敬称略）。

浅野ひとみ、聖ドミニコ女子修道会青野木修道院、仙台市博物館、東北学院大学中央図書館、宮城学院女子大学図書館

註

1. 指定名称は「メダイ残欠」であるが、欧米での一般的な呼称はプラケット（英語・仏語 *plaque*、伊語 *placchette*、西語 *plaqueta*）であるので、本稿ではこの呼称を使用する。

東京国立博物館は1949年開催の「日本初期の西洋文化展」で「メダル」と「銅版牌」の語を用い「メダイ」は用いていない（東京国立博物館資料課編1971）。「メダイ」の語は慶長遣欧使節関係資料を重要文化財に指定することを告示した『官報』号外第68号（1966年6月11日発行）で初めて使用され、公

式用語となった。しかし、ここで「メダイ」とされたものは、実はブラケットであったため、当初から用語に混乱が生じた。「メダル」から「メダイ」への呼称変更は慶長遣欧使節関係資料を重要文化財に指定する際に神学博士マリオ・マレガ神父から教示を受けたことによるものであった（財津1966）。1963年発行の『キリスト教大事典』には仏語の「メダイユ Médaille」が立項されているから、「メダイ」はこれに由来するものと思われる（日本基督教協議会文書事業部キリスト教大事典編集委員会編1963）。

『東京国立博物館図版目録 キリシタン関係遺品篇』（東京国立博物館編1972）では「メダイ」と「銅牌・鉛牌」の語を用い、英語表記は前者が「MEDALS」、後者が「MEDALLIONS」である。もと長崎奉行所保管の「板踏絵」の「銅牌」は楕円形と長方形のものがあり、英語表記は前者が「Oval relief medallion」、後者が「Rectangular relief medallion」である。これらの表記は同書の増補改訂版に踏襲されている（東京国立博物館編2001）。

Medallion（仏語 Médaillon）は大型メダルを意味する。つまり両者を「メダイ」の範疇で捉え、大小で区別していることがわかる。

パチエコ・ディエゴは「片面レリーフの大型メダル」を「ブラケット」とし、片面レリーフであることを条件に加え、「メダイ」「メダリオン」と区別した（ディエゴ1970）。

浅野ひとみは「日本では、小さなメダルから手札大のものまで全部『メダイ』と呼ぶが、機能が異なるので、前者は『メダル』、後者は『ブラケット』と呼び分けたい」とする（堺市博物館編2013）。支持できる意見である。

2. この他、茶色の布上に糸で固定されたロザリオ、ディスチブリナ、テカ、袋、レリカリオ、留金具も同一である。
3. ここでは、インターネットで公開しているメトロポリタン美術館所蔵資料（第1表No.48）を使用した。同館の基本情報によれば、この資料は16世紀のスペイン製で、縦10.2cm、横7.3cmとある。
4. 『東京国立博物館図版目録 キリシタン関係遺品篇（増補改訂版）』も同じ表記である。
5. ブラケットに穿孔が認められることは、珍しいことではない。アウグスブルクで1521年に作られた『マッテウス・シュワルツの祈祷書』の挿図には孔に紐を通して吊下げられているブラケットがみられる。またイタリアの画家ドメニコ・レムプスが1689年頃に描いた騙し絵《骨董品の戸棚》には4点のブ

ラケットが確認でき、それらのすべてが吊り下げ用の孔に通した紐で垂直に飾られている。このようなことから、ブラケットに孔が開けられた時期は制作後、さほど時間を経っていない時期の可能性が高い（Warren2014）。

6. 12名の聖人はつぎのとおりである。聖セバスティアヌス、聖ヒエロニムス、聖アシスクロと聖女ヴィクトリア、マグダラの聖女マリア、アレキサンドリアの聖女カタリナ、聖ドミニクス、聖トマス・アクィナス、聖ベネディクトゥス、アッシジの聖フランチェスコ、パオラの聖フランチェスコ、パドヴァの聖アントニウス、アルカラの聖ディエゴ
7. 主題は19を数えるが、〈聖ドミニクス〉〈聖ヒアキントゥス〉〈アンティオキアの聖女ペラギア〉が加わる可能性がある。しかし、博物館・美術館でのこれら3主題の所蔵を確認できなかったため、本稿では保留した。
8. 今野は16世紀後半～17世紀初頭とする聖ライムンドゥスのメダル示し、それは聖ライムンドゥス・ノンナートゥスだとする（今野2013）。しかし列聖年は1657年であるので矛盾する。聖ライムンドゥスは複数人存在するが、メダルの年代を考慮すると1601年に列聖されたペンナフォルテの聖ライムンドゥス（スペインのドミニコ会士）の可能性が高い。
9. ちなみに本稿で保留した〈聖ヒアキントゥス〉の列聖年は1594年であり、17世紀には入らない。
10. インターネットで閲覧できる。アドレスは<http://www.pref.nagasaki.jp/bunkadb/index.php/view>である。
11. 東京国立博物館に2点（C711, C708, 重要文化財、東京国立博物館編2001）、大村市立史料館に1点、大浦天主堂に1点、平戸市生月町博物館・島の館に1点ある。
12. 東京国立博物館に3点（C716, C1005, C717, 重要文化財、東京国立博物館編2001）、仙台市博物館に1点（国宝）、徳川ミュージアムに1点（サントリー美術館編1974）、天草市有明町（個人蔵）に1点（同市指定文化財）ある。
13. 徳川ミュージアム（サントリー美術館編1974）と南蛮文化館（堺市博物館編2013）にある。
14. ブラケットの情報として重量が記されることは稀である。第1表No.10〈聖ヒエロニムス〉は148.45g, No.15〈聖ヒエロニムス〉は119.8g, No.20〈マグダラの聖女マリア〉は133.4gとの記載がある。
15. アカブルコの北西約700kmに位置する現バンデラス湾のことである。

16. この指摘はすでにされている（仙台市博物館編 2001）。

引用・参考文献

- 石鍋真澄・石鍋真理子・平田隆一 2010 「アマーティ
著『伊達政宗遣欧使節記』『仙台市史特別編 8 慶
長遣欧使節』仙台市 57頁
- 伊藤晴子 1999 「メダイ（メダル）—聖フランシスコ・
ザビエルの死／聖イグナティウス・デ・ロヨラ』『来
日450周年 大ザビエル展 図録』東武美術館・朝日
新聞社 94, 192頁
- 大分県立博物館編 2015 『キリスト教王国を夢見た大
友宗麟』大分県立博物館 48頁
- 片岡弥吉 1969 『踏絵—禁教の歴史—』日本放送出版
協会 65～66頁
- 菊田定郷 1933 『東北遺物展覧会記念帖』東北遺物展
覧会
- 共同訳聖書実行委員会 1990 『聖書：新共同訳』日本
聖書協会（新）3頁, 20頁, 61頁, 102頁, 164頁
- 五野井隆史 2006 「キリスト教布教とキリシタンの道
具（2）」『英知大学キリスト教文化研究所紀要』第
21巻第1号 英知大学キリスト教文化研究所 10～
11頁
- 今野春樹 2013 『キリシタン考古学—キリシタン遺跡
を掘る—』ニューサイエンス社 72～136頁
- 堺市博物館編 2013 『ICOCU 異国—南蛮とキリシタ
ン美術, 大坂・南蛮文化館より—』堺市博物館 37
頁
- 財津永次 1966 「慶長遣欧使節とその関係資料」『月
刊文化財』第33号 第一法規出版
- サントリー美術館編 1974 『日本のキリシタン美術』
サントリー美術館 図録番号85, 86
- 仙台市史編さん委員会編 2010 『仙台市史特別編 8
慶長遣欧使節』仙台市 史料番号305・306, 373～
374頁
- 仙台市博物館編 2001 『国宝「慶長遣欧使節関係資
料」』仙台市博物館 18～19頁, 26頁, 73～74頁
- 東京国立博物館資料課編 1971 「キリシタン関係遺品
展覧の記録」『MUSEUM』第249号 美術出版社
26～33頁
- 東京国立博物館編 1972 『東京国立博物館図版目録
キリシタン関係遺品篇』東京美術
- 東京国立博物館編 2001 『東京国立博物館図版目録
キリシタン関係遺品篇（増補改訂版）』東京国立博物
館

- 日本基督教協議会文書事業部キリスト教大事典編集委
員会編 1963 「メダイユ」『キリスト教大事典』教
文館 1051頁
- パチエコ・ディエゴ, 1970 「日本におけるスペインの
プラケット」『長崎談叢』第49輯 藤木博英社 103
～106頁
- 濱田直嗣 1995 「『支倉六右衛門遺物』と写真—明治
時代前期の動向を中心に—」『仙台市博物館調査研究
報告』第15号 仙台市博物館 15～24頁
- 平田希昌 1877 『伊達政宗欧南遣使考』博文本社 3
頁
- Bergbauer, Bertrand & Chédeau, Catherine, 2006
*Images en Relief: La Collection de Plaquettes du Musée
National de La Renaissance*. Musée National de La
Renaissance
- Braun, Edmund Wilhelm, 1921 'Über einer Gruppe
spanischer Spätrenaissance-Plaketten.' *Archiv für
Medaillen-und Plakettenkunde*, 3. pp.15-22
- Cannata, Pietro, 1982 *Rilievi e Placchette dal XV al XVIII
secolo*. Museo di Palazzo Venezia
- Fraten, Arne R., 2012 *Medals and Plaquettes in the Ulrich
Midderldorf Collection at the Indiana University Art
Museum*. Indiana University Press p.4, 8
- Kinney, Angela M., ed., 2013 *The Vulgate Bible Volume
VI, The New Testament, Douay-Rheims Translation*.
Harvard University Press p.54
- Lewis, Douglas, 1996 'Plaquette.' *The Dictionary of
Art*, vol.25. Grove pp.18-21
- Pechstein, Klaus, 1968 *Kataloge des Kunstgewerbemuseums
Berlin, III: Bronzen und Plaketten vom ausgehenden 15.
Jahrhundert bis zur Mitte des 17. Jahrhunderts*, Berlin
- Scher, Stephen K., 'Medal.' *The Dictionary of Art*, vol.20.
Grove p.917
- Toderi, Giuseppe & Toderi, Fiorenza Vannel, 1996
*Placchette, secoli XV-XVIII nel Museo Nazionale del
Bargello*. Studio Per Edizioni Scelte-Firenze pp.62-
63, pp.125-126
- Weber, Ingrid S., 1975 *Deutsche, Niederländische und
Französische Renaissanceplaketten 1500-1650*, 2 vols.,
Bruckmann pp.408-413
- Weber, Ingrid S., 1976 'Catalogue of the Exhibition
of Plaquettes.' *Medals and Plaquettes from the Molinari
Collection at Bowdoin College*. Bowdoin College pp.97-
101, 124-125
- Warren, Jeremy, 2014 'A note on the display of
plaquettes.' *Medieval and Renaissance Sculpture*. Vol.3.

Plaquettes. Ashmolean Museum pp.760-767

Warren, Jeremy, 2014 *Medieval and Renaissance Sculpture*.

Vol.3 Plaquettes. Ashmolean Museum pp.1047-1048

第1表の典拠及び情報源

メトロポリタン美術館

<http://www.metmuseum.org/art/collection>

ヴィクトリア・アルバート博物館

<https://collections.vam.ac.uk/technique/quilting/AAT53656/>

ボードウィン・カレッジ

Medals and Plaquettes from the Molinari Collection at Bowdoin College. 1976 Bowdoin College

アッシュモレー博物館

Medieval and Renaissance Sculpture, Vol.3 Plaquettes. Ashmolean Museum

インディアナ大学美術館

Medals and Plaquettes in the Ulrich Midderldorf Collection at the Indiana University Art Museum. 2012 Indiana University Press

国立バルジェロ博物館

Placchette, secoli XV-XVIII nel Museo Nazionale del Bargello, 1996 Studio Per Edizioni Scelte-Firenze

ラザロ・カルディアノ博物館

<http://mismuseos.net/comunidad/metamuseo/recurso/ecce-homo/9425aad8-fbf8-4bd4-b4a8-0dfd146eb4a1>

ヴェネツィア宮殿博物館

Rilievi e Placchette dal XV al XVIII secolo. 1982 Museo di Palazzo Venezia

国立ルネサンス博物館

Images en Relief: La Collection de Plaquettes du Musée National de La Renaissance. 2006 Musée National de La Renaissance

出津修道院

<http://www.pref.nagasaki.jp/bunkadb/indez.php/view>

東京国立博物館

『東京国立博物館図版目録 キリシタン関係遺品篇 (増補改訂版)』2001 東京国立博物館

南蛮文化館

『ICOCU 異国—南蛮とキリシタン美術, 大坂・南蛮文化館より—』2013 堺市博物館

掲載写真の所蔵機関及び所蔵番号〔 〕

仙台市博物館：第1図，第2図a

メトロポリタン美術館：第2図b〔60.55.70〕，第4図(1)a〔36.64.47〕，c〔2012.545.1〕，d〔2012.545.2〕，e〔2012.545.5〕，f〔1975.1.1359〕，h〔2012.545.8〕，i〔2012.545.9〕，第4図(2)j〔2012.545.10〕，l〔2012.545.12〕，m〔2012.545.11〕，n〔2012.545.17〕，o〔2012.545.4〕，q〔2012.545.3〕，r〔2012.545.15〕

ヴィクトリア・アルバート博物館：第4図(2)k〔A.30-1925〕

ボードウィン・カレッジ：第4図(1)g〔412C〕

国立バルジェロ博物館：第3図a〔223B〕，b〔269B〕，c〔265B〕，第4図(2)p〔479C〕

南蛮文化館：第4図(1)b〔—〕